～欣浄寺法語メール～２０１７年３月～

「ミテタ」

　春彼岸のお中日をむかえました。昨秋のお彼岸以降に往生された方々を思い起こします。僧侶として生死（しょうじ）を見つめ医師として生死（せいし）を見つめた岳父、子どもの頃遊んでもらった６０代半ばのご門徒、そして員弁組（いなべそ）の仕事を長くご一緒したかけがのない先輩ご住職は今日が葬儀、お見送りでした。

　高知では人が亡くなることを「〇〇さんがみてた」と言うそうです。例えば、「あの人具合が悪いと聞いていたが、昨日亡くなったそうだ」を土佐弁では「〇〇さんが、ワリー言いよったが昨日ミテタ」と表現します。「ミテタ」とは「満たす」ことで、「満ちた」つ

まり「あの人も満足した一生だったに違いない」という言い回しなのです。７０代手前で逝ってしまったご門徒や先輩住職を見送る側の私はといえば「まだ早過ぎるのにな一」という感情がわき上がってくるばかりですが、それでもなお「あの人がミテタ」と見送るのです。そこには、「いくつであっても良く生きた」と迎えてくださる仏さまのはたらきに生きた人々の歴史が刻まれ、今に伝えられています。